

「文明の衝突」について思う

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今年に入ってから、イスラム過激派によるテロ事件が頻発し、世界中を暗くしています。

そこで、私が死蔵していたサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」を紐解いてみました。世界の名著といわれていたので、もう大分以前に購入していましたが、難解で2、3ページめくるだけで本棚に置いたままでした。今回もパラパラめくっていましたが、そこで思わぬ記述を見てびっくり。ロシアとウクライナの紛争を予見していたことです。

この著書は1996年11月に英語版で出版され、その日本語版は2年後の1998年に出版されています。おおよそ20年も前に、どうして両国の紛争が予見できたのか。改めて「文明の衝突」に関心がわいてきました。次に一部(下記)を紹介します。

「ウクライナとロシアのように長距離にわたり無防備な国境を接している大国同士は、しばしば国の安全に対する不安に駆られて張り合うようになる。両国は、この状況を克服して調和の取れた共存を実現するかもしれないが、めったなことではそうならないだろう」。

他方、

「文明の観点からアプローチした場合、両国の間の文化的、個人的、歴史的なつながりが密接なことや両国でロシア人とウクライナ人が交じり合っていることが強調され、かわりに東方正教会に属するウクライナ人と東方統一協会に属するウクライナ人を分けている文明の境目に注目するだろう。つまりロシア・ウクライナ間の戦争よ

りウクライナ人同士での争いがウクライナの分裂を招く可能性が大きい」

とも指摘しています。

つまり分裂の可能性の核は「宗教」であると見えています。ご承知のようにウクライナの現状を見る限り、ウクライナは「親ロシア派」と「反ロシア派」が争っています。

人類の歴史における主要な文明は、世界の主要な宗教とかなり密接に結びついています。民族性や言語が共通していても宗教が違う場合、互いに殺戮しあうことが多いのです。20世紀末には、世界のいたるところで宗教の復興が見られました。その動きは「原理主義運動」となり、各宗教の違いと宗派間対立を生みました。とって、信者が増大したわけではありません。統計資料によれば、「無宗教」「無神論者」の増加が際立っています。しかし次の2大宗教は別格です。

キリスト教徒は改宗で信者を増やしています。イスラム教徒は人口増加率の高い地域で信者が増えています。2025年ごろには世界人口の30%がイスラム教徒になるかもしれません。

さて、次にもうひとつの紛争地を考えてみましょう。

古代メソポタミア文明

古代メソポタミア文明圏は、現在のバクダード以北のイラクとシリア内のティグリス・ユーフラテス川流域に誕生した文明圏を指します。東はザグロス山脈、南のペルシャ湾、南西のアラビア台地、北のアンティ・タウロス山脈に囲まれた平地に発達。南メソポタミア(現在のイラク南部)の気候は砂漠気候。年間を通じて降雨量は150ミリ程度、気温も30度で農耕には不適切です。

一方、北メソポタミア(現在の北イラクと北シリア)は年間250ミリ程度の降雨量があります。この降水量と高原・山麓気候の北メソポタミアは「肥沃な三日月地帯」と呼ばれています。より雨量

の多いアンティ・タウロス山脈の南斜面では紀元前1万年前から農耕が始まっていた。

南メソポタミアで農耕が始まったのは、灌漑施設が整備された紀元前5000年になってからでした。ティグリス・ユーフラテス川はしばしば氾濫し、安定した耕作ができませんでしたが、北メソポタミアからもたらされた灌漑施設の技術により、少ない降雨量でも農業が成立するようになりました。自然条件を克服するという「人類の技」の賜物です。かなり高度な灌漑施設だったそうです。

そうした技術を維持し、次世代に伝承するためにはきちんとした共同体と優れた指導者を必要とします。宗教的カリスマ性をそなえた人物が選ばれて指導者となりました。巨大な権力を持つ「王」の原型です。

メソポタミアの古代都市国家では、最初に神を祀る神殿が作られ、その神殿を取り巻くように居住区が形成され、次第に大規模化して都市に発展しました。収穫された農産物は神殿に収められ、分配・備蓄などが神の命により執り行われました。そして、垂直的な社会構造が形成されるようになって、王を頂点とする支配層、神官・役人層と続き、大部分は農民と商人が占めました。

最古の都市文明シュメール

メソポタミア文明の最盛期は、謎の民族といわれるシュメール人によって築かれた文明で、人類が生み出した最古の都市文明でした。代表的な都市は南メソポタミアのエリドゥ、ウルク、ウル。エリドゥは人類最初の「王権」が誕生した都市とされ、紀元前5000年ごろといわれています。ウルクとウルには農耕に関わる集団と狩猟採集に携わる集団が合流して大きな力を持つようになりました。

又、ウルにはジグラトと呼ばれる古代宗教建造物が残っており、この建造物は旧約聖書のバベルの塔のモデルといわれています。旧約聖書に出て

くるアブラハムはウルで生まれ、信仰を求めてカナン（現在のイスラエル）へと旅立ちます。旧約聖書にはメソポタミアの地名が数多く出てきます。

楔形文字もシュメール民族によって発明されました。農産物の記録を残すために考え出されといわれており、その発明は紀元前3500年ごろのことです。粘土板に刻み込まれ、恒久的な記録は窯で焼いて保存されました。後のアルファベットの源流となったウガリット文字も楔形文字が源流であり、ウルクの王の伝説である「ギルガメッシュ叙事詩」も楔形文字があったから残されたといえます。この叙事詩がユダヤ教やキリスト教に与えた影響の大きさを考えるとシュメール文明の素晴らしさが分かります。

シュメール文明の滅亡

この文明は紀元前5000年ごろ、メソポタミア文化圏が組織的な農耕を始めた時期に生まれ、以後紀元前1000年ごろまで5000年ぐらいつづきました。シュメール文明は卓越した灌漑施設による農耕の繁栄によって築かれてきましたが、そのシュメール文明が塩害による農業の衰退によって滅亡しました。

長年の農地使用によって土中に塩類を蓄積させ、同じ作物の連作で農地はやせ衰えました。現代流に言えば「環境破壊」による農業破壊が食糧危機を招き、文明の衰退につながったといえるでしょう。

シュメール文明が残した都市文明という遺産は、後のギリシャやローマ、更には中世以降の西洋文明に引き継がれています。そしてこの偉大な文明発祥の地が、いまや紛争地として泥沼化しています。紛争の当事者の背後には大国の影も見えます。可哀想なのは一般市民ですが、何より歯がゆいのは、何もできずただ日々を送る私たちといえるかもしれません。